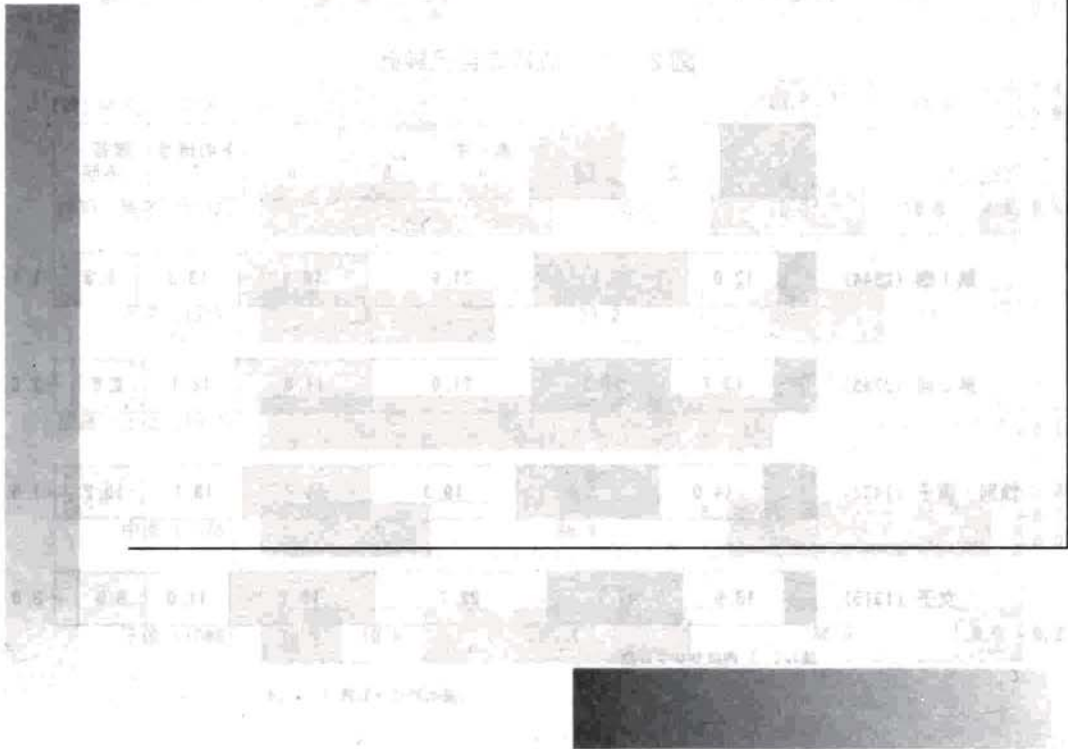


第2章 中学生の学習観・成績観

■
菊地 栄治

(国立教育研究所研究員)



第1節 中学生は自分の成績を どうとらえているか

1. 成績の自己評価

【中位の3つの選択肢に回答が集中する傾向がある(56.9%)。1つの山をもつ左右対称の分布を示している。中央付近に集中する傾向は、どちらかといえば女子に強い。】(図2-1)

績は別として) うんとがんばればどのくらいの成績がとれると思うか、という3つの側面から中学生の成績観を探ってみた。

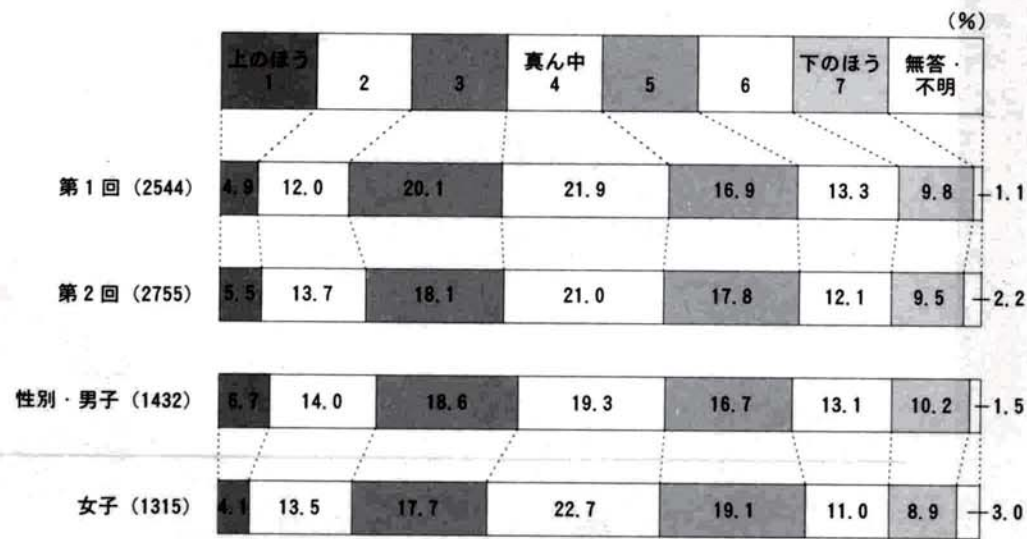
まず、学年の中での総合的な成績についてみてみよう。選択肢は、7段階である(「1」を上の方とし、「4」を真ん中にとり、「7」を下の方とする)。全体としてみると、「3」～「5」の3つの選択肢に56.9%が集中しており、真ん中に山をもつほぼ左右対称の分布をなしていることがわかる。また、前回から大きな変化はみられない。

性別にみると、女子のほうが「3」～「5」と答える割合が若干大きくなっている。これに対して、男子はどちらかといえば両極に分かれる傾向が比較的強い。

Q8 あなたの学校での成績についてうかがいます。
A. 現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。

中学生は、自分の成績をどのようにみているのだろうか。今回の調査では、(1)現在の総合的な成績はどのくらいか、(2)どのくらいの成績がとれたらよいか、(3)(現在の成

図2-1 成績の自己評価



注) () 内はサンプル数。

2. どのくらいの成績がとれたらよいか

【ほとんどの中学生が真ん中よりも上の成績を希望している。成績下位者よりも成績上位者でこの傾向がひととき強い。】(図2-2)

回答は大きく「上のほう」に偏っている。「1」と「2」の2つのカテゴリで全体の6割近くを占めている。「下のほう」の3つの選択肢を希望する者は3.4%にすぎない。

前回(第1回調査)と比べて、「1」を選んだ割合が若干増え、その分「2」が減るとい変化がみられた。

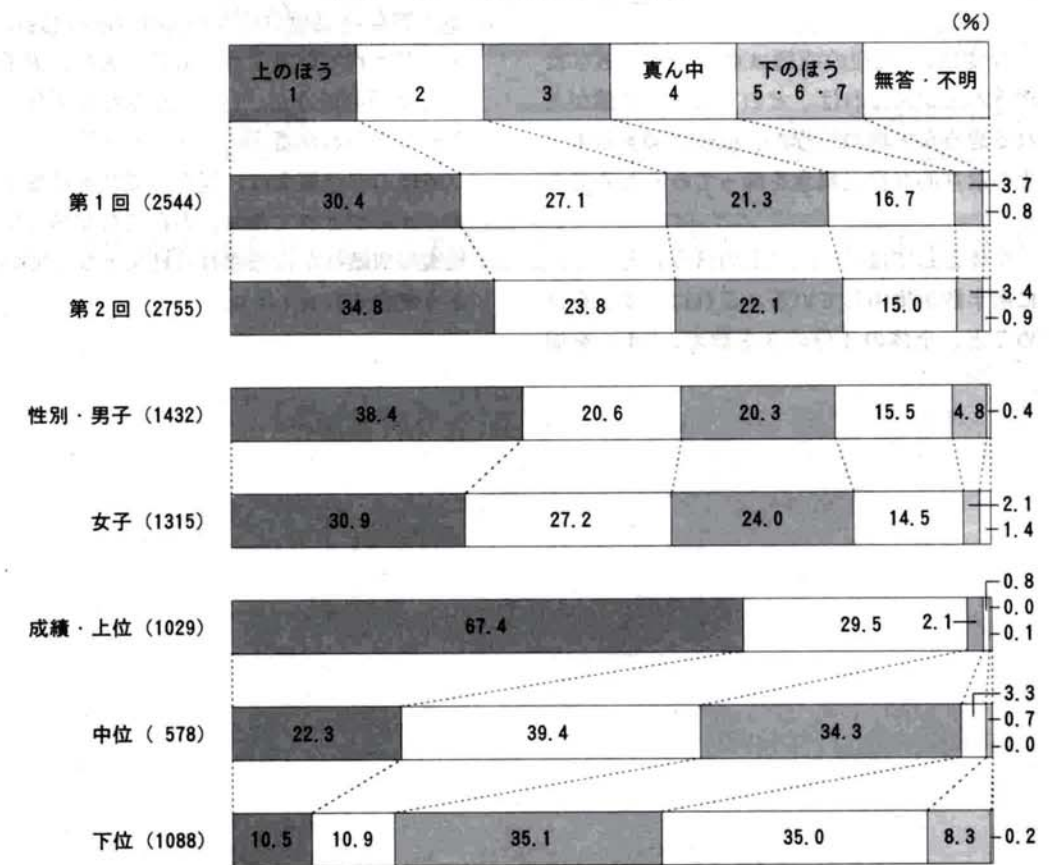
性別にみると、「1」を希望する者は男子に多く、女子の場合は「2」や「3」が比較的多いことがわかる。男子の成績への意欲は女子よりも分極化している。

成績の自己評価別にみると、成績上位者ほ

Q8 あなたの学校での成績についてうかがいます。
B. あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。

それでは、中学生はどのくらいの成績を望んでいるのだろうか。次に、期待する成績水準についてみてみよう。

図2-2 とれたらいい成績



注) () 内はサンプル数。

ど、もっと高い成績を希望する傾向があることがわかる。現状に満足するのではなく、さらに高い成績を希望しているようである。

逆にいえば、成績下位者の意欲はかなり萎んだ状態にある。

3. うんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うか

【9割を超える中学生は、(現在の成績は別に) がんばれば学年で「真ん中」以上の成績がとれると考えている。しかし、この潜在的な自己概念は、現実の成績によって強く規定されている。】(図2-3)

Q8 あなたの学校での成績についてうかがいます。
C. それでは、現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

今回は、「現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うか」尋ねてみた。成績に関する中学生の潜在的な自己概念を探ってみるためである。

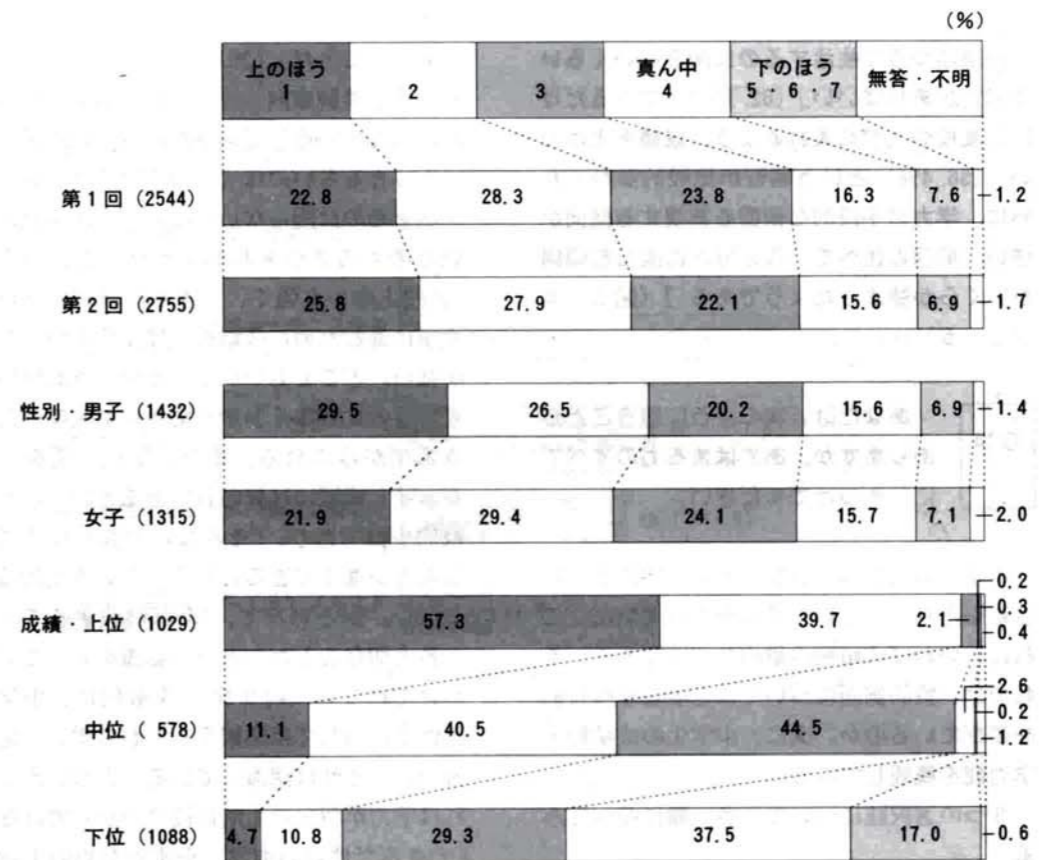
全体としては、「1」(上のほう)と「2」に過半数が集中している。これに「3」を含めると、全体の4分の3を数え、「4」を加

えると9割を超えることになる。先の現実の成績の自己評価と照らし合わせると、中学生の大部分は実際の自己評価よりもはるかに高い潜在能力をもっていると自認していることがわかる(この傾向は、前回と同様)。努力をすれば、かなり上位の成績をとることができると思う中学生は信じているようである。

しかし、すべての者がそう考えているわけではない。たとえば、成績の自己評価と潜在的な成績の自己概念は見事に相関している。成績上位者に比べて、成績下位者の自己概念はかなり否定的である。現実の成績によって、潜在的な自己概念のレベルでも否定的にイメージされているようである。また、男子よりも女子のほうが、「1」と答える割合が小さいことがわかる。

成績の自己概念は、現在の成績を基盤にしてイメージされており、潜在的なレベルにも現実の成績観が投影される結果となっているようである。

図2-3 がんばればとれる成績



注) () 内はサンプル数。